

「では皆さんは、そういうふうには川だといわれたり、乳の流れたあとだといわれたりしていた、このぼんやりと白いものが本当は何かご承知ですか。」先生は、黒板につるした大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところをさしながら、みんなに問いをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四、五人、手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、この頃は、ジョバンニはまるで毎日教室でも眠く、本を読む暇も読む本もないので、なんだかどうんなこともよくわからないという気持ちでするのでした。

ところが先生は、早くもそれを見つけたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは勢いよく立ち上がりましたが、立ってみるともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席から振り返って、ジョバンニを見てくすつと笑いました。ジョバンニはもうどきまぎして真っ赤になってしまいました。先生がまた言いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよっく調べると、銀河はだいたいなんでしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたが、今度もすぐに答えることができませんでした。